

まじない!? 祈り!? 新発見の人形木製品

平城京右京二条三坊二坪 奈良市青野町

調査の概要 調査地は、平城京条坊復原で右京二条三坊二坪の北半部にあたります。この坪ではこれまで4回の調査を行っており、平成11年度でほぼ全域の調査を終了しました。その結果、縄文時代から鎌倉時代までの数多くの遺構・遺物が見つかりました。平成11年度の調査では、奈良時代の遺構として、掘立柱建物跡55棟、掘立柱跡跡11条、井戸17基、土坑7基、溝9条などが見つかり、このほか鎌倉時代の土坑や溝も見つかりました。

過去の調査成果とあわせて、奈良時代のこの坪の利用の仕方を考えてみると、塀や溝が坪をちょうど二等分したり四等分したりする位置に設けられていることがわかってきました。このことは坪の中がいくつかに分割されていたことを示していると考えられます。当時の文献資料から、最小の個人宅地としてわかっているのは32分の1坪という広さですが、この坪でも最も小さく分割された宅地は坪の32分の1の広さだったようです。広さによる宅地の割り当ては、そこに住む人の位によって決まりますが、この坪内には下級の役人が住んでいた場所もあったようです。

また、各宅地には必ず一つ以上の井戸が掘られました。一見無造作に掘られているような多数の井戸も、小さな宅地では一つ、大きな宅地では二つというふうに、分割された宅地ごとに配置されている様子がわかりました。これらの井戸の作り方は様々で、板を縦にして組んだものや横にして組んだもの、底に曲物を据えたものなどがあります。なかには廃材（扉板など）を井戸枠材として再利用したものもあります。そして井戸を廃棄する際には、底に土器を沈めたり、使える材木を抜き取っていったりとさまざまな行為がなされています。なかには現在でも見られる「気抜き」のための筒を、丸瓦を組み合わせて作っているものがあり、奈良時代からその風習があったことがわかりました。これらの井戸からは多くの遺物が出土しますが、井戸の中は水分が多いため木製品や金属製品もよく残っています。発掘区西南部で見つかった横板組掘柱留と呼ばれるタイプの井戸からは人形木製品や4枚の銅銭が出土しました。また、この井戸のまわりからは、普通は使うことのできない釉薬をかけた瓦（三彩瓦）も出土しています。

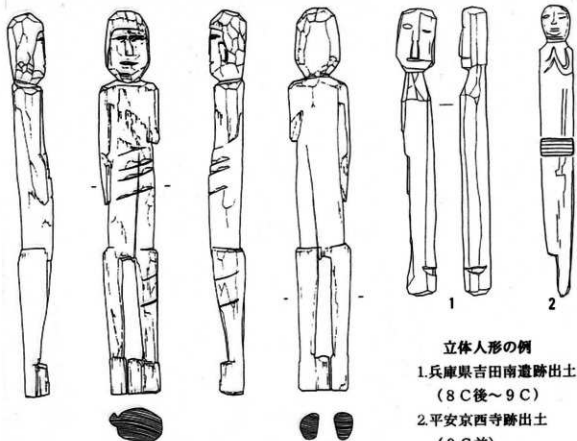


調査位置図 1/10,000

人形木製品について 平成11年度の調査で見つかった井戸の1つから、8世紀末～9世紀初めの遺物とともに、人物を形作った木製品が出土しました。この人形木製品は、高さ19.9cm、最大幅3.1cm、最大厚1.9cmで、ヒノキを用いています。左肘から胸の表面にかけては壊れていますが、ほぼ完形です。顔は彫刻された後、さらに目、口、耳を墨で描き、胸部には衣のヒダが彫り込みで表現されています。ではこの木製品はいったい何なのでしょう？

まず考えられるのが人形（ひとがた）です。これは「祓え」や「治療」のまじないに用いられるもので、生きている人間の形代（かたしろ）として作られるものです。平城京で発見されるものの多くは、薄板を使って扁平な人の形に仕上げたもので、顔も墨書だけで表現されます。その中にまれに立体的に作られたものがあり、立体人形と呼ばれます。しかしそれにおいても顔からはかなり簡略的な表現がされるのが普通で、やはり形代として作られたものです（図1・2）。

次に考えられるのは仏像もしくは神像ですが、时期的には仏像の可能性が考えられます。軽く前に曲げて垂らした右腕、胸部の衣の表現などは仏像のそれと共通するものがあります。また頭部は仏に見られる髮際（へっさい）を表現したものととも考えられます。足のように見える下部は差し込み部等と考え、像本体とは別として見ると、実に仏像とよく似ています。もちろん仏師が彫ったものとは大きく異なりますが、当時は一般庶民が仏像を彫ることもあったようで、子供でさえ遊びで仏像を彫ったということが文献から知られます。ただし今のところは人形とも仏像とも判断はしかねます。いったいこの木彫りの人物にはどんな思いが込められていたのでしょうか。



立体人形の例

- 1.兵庫県吉田南遺跡出土
(8C後～9C)
- 2.平安京西寺跡出土
(9C前)

平城京右京二条三坊二坪出土人形木製品

(図は全て1/2)